

日本医学会総会2015関西平行企画
「医の倫理—過去・現在・未来」
京都ブレ企画「医の倫理」ゼミ
第1回「過去・戦争と医学」講義①

15年戦争期における 日本の医学犯罪

土屋 貴志

(大阪市立大学大学院文学研究科)

1

自己紹介

- 専門は倫理学、医療倫理学、人権問題研究。医療倫理学では医学研究倫理や生命倫理学史を研究
- 1961(昭和36)年生まれ。1990(平成2)年3月、慶応義塾大学大学院文学研究科哲学専攻(倫理学分野)博士課程単位取得満期退学
- 1989(平成元)年4月から1994(平成6)年3月まで杉野女子大学・横浜国立大学・千葉大学などで非常勤講師。1994(平成6)年4月より大阪市立大学文学部教員(現在准教授。哲学教室所属)
- 大阪市立大学人権問題研究センター兼任研究員。医学部で「医療倫理学」(学部1回生および医科学研究科[修士課程]必修科目)、看護学研究科で「看護倫理学」(修士課程必修科目)、経営学研究科で「医療経営論」の「医療倫理」を兼任。看護学研究科と文学研究科の研究倫理審査委員
- 2005年から2013年まで「薬害イレッサ西日本訴訟を支援する会」共同世話人
- 「15年戦争と日本の医学医療研究会」幹事、当平行企画実行委員

2

スライドの由来と改訂履歴

- 2005年7月、第22回国際科学史学会大会(中国・北京)のシンポジウム発表のために英文で作成
<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/tsuchiya/gyoseki/presentation/1CHS05Soral.html>
- 2006年8月、第8回生命倫理世界会議(中国・北京)の全体講演のために英文で改訂
<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/tsuchiya/gyoseki/presentation/1AR8index.html>
- 2007年2月、第27回日本医学会総会出展「戦争と医学」展の展示パネル(2007年)の第1部の原案として作成
※当該パネルは現在『戦争と医の倫理』の検証を進める会のパネル「戦争と医の倫理」(2012年) <http://avic.doc-net.or.jp/syuppan/120909panel-syupdf> として大幅に改訂されている
- 2008年11月、日本生命倫理学会第20回年次大会(九州大学医学部)大会企画シンポジウム講演のために改訂
<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/tsuchiya/gyoseki/presentation/08JARSides.pdf>
- 2012年7月、第53回日本社会医学学会総会(関西大学)ミニシンポジウム報告のために改訂
- 2013年7月、第54回日本社会医学学会総会(首都大学東京)シンポジウム3の基調講演のために改訂
<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/user/tsuchiya/gyoseki/presentation/2014Shakaigakukai.pdf>
- 2014年8月、当ゼミのために改訂

3

「医学犯罪」=医師によって、医学の名の下に行われた反人道的行為

15年戦争期の日本による医学犯罪

1. 研究(人体実験) —目的別

(1) 疾患の解明(科学的知識の獲得)

細菌学的研究、生理学的研究、人類学=解剖学的研究など

(2) 治療法の開発

ワクチン、手術法、止血法、輸血法など

(3) 兵器の開発

生物兵器、化学兵器・毒物

2. 軍医の訓練(「手術演習」)

3. 生物兵器の使用

4

石井機関とは

石井四郎軍医が創設した日本陸軍の軍事医学ネットワークは「石井機関」と呼ばれていた。その「731部隊」では、少なくとも約3000人の中国人などを実験材料として用い殺害したうえ、生物兵器を製造しノモンハン事件や日中戦争の最中に使用した。人体実験の実行者たちは敗戦時に日本へ逃げ帰り、米軍に研究データを提供して、戦犯免責および金品を得た。戦後この事実が隠蔽されたため、総括が行われることもなく、実験を行った医師・医学者の多くが、医学界の要職を占めた。



石井四郎

石井四郎は1920年に京都帝国大学医学部を卒業した。1925年に毒ガスと生物兵器の使用を禁じたジュネーヴ議定書が定められたことで、かえって生物兵器の可能性に気づき、その研究開発を軍上層部に促すようになる。

1930年、欧米遊学から帰った石井は、陸軍軍医学校の防疫部・防疫学教室の教官に就任した。彼は生物兵器を開発することで陸軍における軍医の地位を向上させるとともに、既存の帝国大学医学部などをしのぐ軍事医学研究機関のネットワークを築こうとした。



中枢-陸軍軍医学校防疫研究室

1931年、関東軍が「満洲事変」を起こして中国東北部を支配下におさめたことで、石井は構想を実現する機会を得た。翌1932年、石井は東京の陸軍軍医学校に「防疫研究室」を設立する。石井機関の中枢を担ったのはこの防疫研究室であり、陸軍参謀本部はこれを「陸軍防疫給水部」と呼び、中国現地における731部隊やその姉妹部隊と一体のものとして指揮運営していた。



『陸軍軍医学校防疫研究報告』

防疫研究室が発行していた研究紀要が『陸軍軍医学校防疫研究報告』である。編集の中心者は、石井四郎の右腕で、戦後「ミドリ十字」の社長になる内藤良一だ。

『防疫研究報告』には「第1部」と「第2部」がある。「第2部」は1933年～1944年に受け付けられた947号までの論文からなり、その大部分が米国議会図書館等で発見され復刻されているが、より機密性が高い「第1部」の諸論文は断片的にしか発見されていない。

『防疫研究報告』の諸論文をみると、当時の医学界が石井機関といかに密接な関係にあったかがわかる。

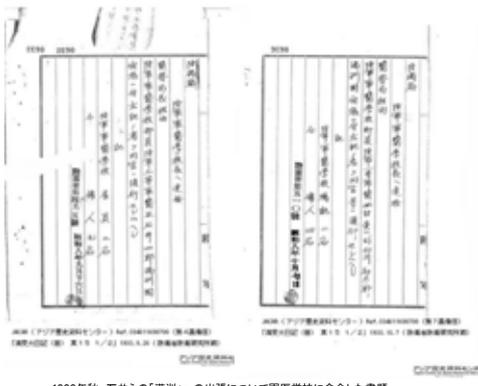
陸軍軍医学校防疫研究報告 第10号

頁	題名	著者	種別	頁数	発行年	巻	号
1	ペスト菌の培養	金子順一	論文	1-10	1943	10	1
11	ペスト菌の培養	金子順一	論文	11-20	1943	10	2
21	ペスト菌の培養	金子順一	論文	21-30	1943	10	3
31	ペスト菌の培養	金子順一	論文	31-40	1943	10	4
41	ペスト菌の培養	金子順一	論文	41-50	1943	10	5
51	ペスト菌の培養	金子順一	論文	51-60	1943	10	6
61	ペスト菌の培養	金子順一	論文	61-70	1943	10	7
71	ペスト菌の培養	金子順一	論文	71-80	1943	10	8
81	ペスト菌の培養	金子順一	論文	81-90	1943	10	9
91	ペスト菌の培養	金子順一	論文	91-100	1943	10	10

ペスト菌(PX)の効果について論じた金子順一の論文(『防疫研究報告』第10号第60号、1943年12月14日受付)。金子は1944年にこの論文を含む論文集を東京大学へ提出して学位を申請し、1949年に博士号を授与された。

背陰河の東郷部隊

防疫研究室を設立すると同時に石井は、ハルビン南東約70km、五常の近くの寒村「背陰河」に、秘密部隊「東郷部隊」を設置する。東郷部隊は731部隊の前身であり、実験材料にされた人々の牢獄を備えた研究施設をもち、1933年秋ころから残虐な人体実験が始められた。



1933年秋、石井らの「満洲」への出張について軍医学校に命令した書類

水だけを飲ませる耐久実験

1935年から1936年にかけて背陰河の東郷部隊に傭人として勤めた栗原義雄は、水だけを飲ませる耐久実験について、戦後に次のように証言している。

「自分は、軍属の菅原敏さんの下で水だけで何日生きられるかという実験をやらされた。その実験では、普通の水だと45日、蒸留水だと33日生きました。蒸留水を飲まされ続けた人は死が近くなると「大人、味のある水を飲ませてくれ」と訴えました。45日間生きた人は「左光亜（サコウア）」という名前の医者でした。彼は本当にインテリで、匪賊ではなかったですね。」



菅原敏の日記「水だけで何日生きられるかという実験」の記録。菅原敏の日記、1935年、p.127

平房へ

背陰河の東郷部隊の施設は大規模かつ秘密裡に致死的な人体実験を行うには不十分だった。そこで石井と関東軍は背陰河の施設を放棄し、ハルビン南東約15kmの「平房」地区に、より堅固な牢獄と生物兵器生産施設を備えた、大規模な研究施設群を建設することにした。1935年に周辺の4つの村の住民が強制退去させられて建築が始まり、1939年頃に専用飛行場、隊員とその家族の宿舎、学校や神社まで備えた一大軍事基地が完成した。



関東軍防疫給水部本部施設全図

平房の施設建設

平房の施設は周囲計80平方キロが特別軍事区域に指定されており、とくに本部を中心とした約6平方キロメートルの地域は、土塙と高压電線と堀に囲まれていた。主たる研究実験施設かつ生物兵器工場である建物はその形状から「口号棟」と呼ばれ、実験材料にされた人々を収容した2つの「特設監獄」はその中庭に設けられていたので、たとえ彼らが牢から脱出して外に出られないようになっていた。

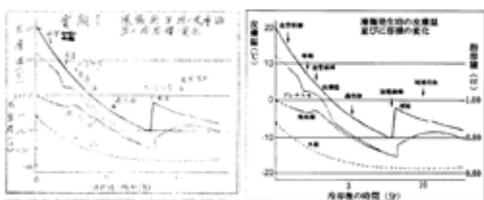


悪魔の第七三一部隊の全貌。第七三一部隊駐屯地。写真によって撮影された部隊施設全景。カタカナの「口」の字形をした通称「口号棟」と呼ばれる部隊本部建物や、「口号棟」に囲まれた特設監獄(仮称マルタ小屋)が、はっきりと見える。

吉村寿人の凍傷実験

吉村寿人は1938年から1945年の敗戦まで731部隊で凍傷の研究を行った。それは実験台にされた人々の手足を人為的に凍結させる残酷なものだった。

1941年に吉村は満洲医学会ハルビン支部で自分の研究成果について講演し、その中で指に凍結が起こる際の皮膚温と指の容積の変化を測定したグラフを示した。(左。手書きで読みにくいため、刈田啓史郎氏による清書を右に並べて示す)



「凍傷実験」(1941年)の清書。左の欄に「生体」として8人の中国人の氏名と年齢、番号が書かれている。

吉村が戦後に発表した英語論文

STUDIES ON THE REACTIVITY OF SKIN VESSELS TO EXTREME COLD
PART II. FACTORS GOVERNING THE INDIVIDUAL DIFFERENCE OF THE REACTIVITY, OR THE RESISTANCE AGAINST FROST-BITE.

HIKARU YOSHIMURA AND YOSHITSUGU IDEKI
Institute of Physiology, Keio Prefectural Medical College, Kyoto, and
Institute of Physiology, Sapporo Prefectural Medical College, Sapporo.

Fig. 2. Temperature reaction in cold exposure in a body.

Table 1. Sexual difference of reactivity index measured on children.

Age (years)	Sex	Sexual difference of reactivity index
1-3	Male	0.15
4-6	Male	0.10
7-9	Male	0.05
10-12	Male	0.02
13-15	Male	0.01
16-18	Male	0.00
19-21	Male	0.00
22-24	Male	0.00
25-27	Male	0.00
28-30	Male	0.00
31-33	Male	0.00
34-36	Male	0.00
37-39	Male	0.00
40-42	Male	0.00
43-45	Male	0.00
46-48	Male	0.00
49-51	Male	0.00
52-54	Male	0.00
55-57	Male	0.00
58-60	Male	0.00
61-63	Male	0.00
64-66	Male	0.00
67-69	Male	0.00
70-72	Male	0.00
73-75	Male	0.00
76-78	Male	0.00
79-81	Male	0.00
82-84	Male	0.00
85-87	Male	0.00
88-90	Male	0.00
91-93	Male	0.00
94-96	Male	0.00
97-99	Male	0.00
100-102	Male	0.00
103-105	Male	0.00
106-108	Male	0.00
109-111	Male	0.00
112-114	Male	0.00
115-117	Male	0.00
118-120	Male	0.00
121-123	Male	0.00
124-126	Male	0.00
127-129	Male	0.00
130-132	Male	0.00
133-135	Male	0.00
136-138	Male	0.00
139-141	Male	0.00
142-144	Male	0.00
145-147	Male	0.00
148-150	Male	0.00
151-153	Male	0.00
154-156	Male	0.00
157-159	Male	0.00
160-162	Male	0.00
163-165	Male	0.00
166-168	Male	0.00
169-171	Male	0.00
172-174	Male	0.00
175-177	Male	0.00
178-180	Male	0.00
181-183	Male	0.00
184-186	Male	0.00
187-189	Male	0.00
190-192	Male	0.00
193-195	Male	0.00
196-198	Male	0.00
199-201	Male	0.00
202-204	Male	0.00
205-207	Male	0.00
208-210	Male	0.00
211-213	Male	0.00
214-216	Male	0.00
217-219	Male	0.00
220-222	Male	0.00
223-225	Male	0.00
226-228	Male	0.00
229-231	Male	0.00
232-234	Male	0.00
235-237	Male	0.00
238-240	Male	0.00
241-243	Male	0.00
244-246	Male	0.00
247-249	Male	0.00
250-252	Male	0.00
253-255	Male	0.00
256-258	Male	0.00
259-261	Male	0.00
262-264	Male	0.00
265-267	Male	0.00
268-270	Male	0.00
271-273	Male	0.00
274-276	Male	0.00
277-279	Male	0.00
280-282	Male	0.00
283-285	Male	0.00
286-288	Male	0.00
289-291	Male	0.00
292-294	Male	0.00
295-297	Male	0.00
298-300	Male	0.00
301-303	Male	0.00
304-306	Male	0.00
307-309	Male	0.00
310-312	Male	0.00
313-315	Male	0.00
316-318	Male	0.00
319-321	Male	0.00
322-324	Male	0.00
325-327	Male	0.00
328-330	Male	0.00
331-333	Male	0.00
334-336	Male	0.00
337-339	Male	0.00
340-342	Male	0.00
343-345	Male	0.00
346-348	Male	0.00
349-351	Male	0.00
352-354	Male	0.00
355-357	Male	0.00
358-360	Male	0.00
361-363	Male	0.00
364-366	Male	0.00
367-369	Male	0.00
370-372	Male	0.00
373-375	Male	0.00
376-378	Male	0.00
379-381	Male	0.00
382-384	Male	0.00
385-387	Male	0.00
388-390	Male	0.00
391-393	Male	0.00
394-396	Male	0.00
397-399	Male	0.00
400-402	Male	0.00
403-405	Male	0.00
406-408	Male	0.00
409-411	Male	0.00
412-414	Male	0.00
415-417	Male	0.00
418-420	Male	0.00
421-423	Male	0.00
424-426	Male	0.00
427-429	Male	0.00
430-432	Male	0.00
433-435	Male	0.00
436-438	Male	0.00
439-441	Male	0.00
442-444	Male	0.00
445-447	Male	0.00
448-450	Male	0.00
451-453	Male	0.00
454-456	Male	0.00
457-459	Male	0.00
460-462	Male	0.00
463-465	Male	0.00
466-468	Male	0.00
469-471	Male	0.00
472-474	Male	0.00
475-477	Male	0.00
478-480	Male	0.00
481-483	Male	0.00
484-486	Male	0.00
487-489	Male	0.00
490-492	Male	0.00
493-495	Male	0.00
496-498	Male	0.00
499-501	Male	0.00
502-504	Male	0.00
505-507	Male	0.00
508-510	Male	0.00
511-513	Male	0.00
514-516	Male	0.00
517-519	Male	0.00
520-522	Male	0.00
523-525	Male	0.00
526-528	Male	0.00
529-531	Male	0.00
532-534	Male	0.00
535-537	Male	0.00
538-540	Male	0.00
541-543	Male	0.00
544-546	Male	0.00
547-549	Male	0.00
550-552	Male	0.00
553-555	Male	0.00
556-558	Male	0.00
559-561	Male	0.00
562-564	Male	0.00
565-567	Male	0.00
568-570	Male	0.00
571-573	Male	0.00
574-576	Male	0.00
577-579	Male	0.00
580-582	Male	0.00
583-585	Male	0.00
586-588	Male	0.00
589-591	Male	0.00
592-594	Male	0.00
595-597	Male	0.00
598-600	Male	0.00
601-603	Male	0.00
604-606	Male	0.00
607-609	Male	0.00
610-612	Male	0.00
613-615	Male	0.00
616-618	Male	0.00
619-621	Male	0.00
622-624	Male	0.00
625-627	Male	0.00
628-630	Male	0.00
631-633	Male	0.00
634-636	Male	0.00
637-639	Male	0.00
640-642	Male	0.00
643-645	Male	0.00
646-648	Male	0.00
649-651	Male	0.00
652-654	Male	0.00
655-657	Male	0.00
658-660	Male	0.00
661-663	Male	0.00
664-666	Male	0.00
667-669	Male	0.00
670-672	Male	0.00
673-675	Male	0.00
676-678	Male	0.00
679-681	Male	0.00
682-684	Male	0.00
685-687	Male	0.00
688-690	Male	0.00
691-693	Male	0.00
694-696	Male	0.00
697-699	Male	0.00
700-702	Male	0.00
703-705	Male	0.00
706-708	Male	0.00
709-711	Male	0.00
712-714	Male	0.00
715-717	Male	0.00
718-720	Male	0.00
721-723	Male	0.00
724-726	Male	0.00
727-729	Male	0.00
730-732	Male	0.00
733-735	Male	0.00
736-738	Male	0.00
739-741	Male	0.00
742-744	Male	0.00
745-747	Male	0.00
748-750	Male	0.00
751-753	Male	0.00
754-756	Male	0.00
757-759	Male	0.00
760-762	Male	0.00
763-765	Male	0.00
766-768	Male	0.00
769-771	Male	0.00
772-774	Male	0.00
775-777	Male	0.00
778-780	Male	0.00
781-783	Male	0.00
784-786	Male	0.00
787-789	Male	0.00
790-792	Male	0.00
793-795	Male	0.00
796-798	Male	0.00
799-801	Male	0.00
802-804	Male	0.00
805-807	Male	0.00
808-810	Male	0.00
811-813	Male	0.00
814-816	Male	0.00
817-819	Male	0.00
820-822	Male	0.00
823-825	Male	0.00
826-828	Male	0.00
829-831	Male	0.00
832-834	Male	0.00
835-837	Male	0.00
838-840	Male	0.00
841-843	Male	0.00
844-846	Male	0.00
847-849	Male	0.00
850-852	Male	0.00
853-855	Male	0.00
856-858	Male	0.00
859-861	Male	0.00
862-864	Male	0.00
865-867	Male	0.00
868-870	Male	0.00
871-873	Male	0.00
874-876	Male	0.00
877-879	Male	0.00
880-882	Male	0.00
883-885	Male	0.00
886-888	Male	0.00
889-891	Male	0.00
892-894	Male	0.00
895-897	Male	0.00
898-900	Male	0.00

吉村は、戦後に同様の研究成果を英語論文にして発表し直した。その中に、生後3日の新生児にも実験した結果を示している。(左)しかし、その英語論文には、被験者の指を凍結させていたことを示すグラフは載せていない。

吉村はその後、京都府立医科大学の教授から学長になり、1978年「環境適応学」の先駆的業績を挙げたとの理由で勲三等旭日章を授与された。

「冬季衛生研究」

大同陸軍病院の谷村一治軍医少佐は「冬季衛生研究班」を組織し、1941年1月31日から2月11日にかけて内蒙古で、凍傷、テントでの手術、止血、輸血などについて研究する野外演習を行った。彼らは8人の中国人を「生体[体]」すなわち実験材料として「携行」している。実験材料とされた8人の中国人は他の実験や手術の対象となり、最後には生体解剖で殺されるか銃殺された。

姓名	年齢	性別	国籍	備考
張三	25	男	中国	
李四	30			

「弔辞」の文言

弔 辞

惟時皇紀二六〇一年二月八日
 研究班生体の霊に告ぐ

御身等は生国生年月日は異なれども東亜の一角中華民国に生を受け不幸にして誤れる思想行動をなし蒋介石の走狗となり公明正大の正義の皇軍に不利なる対敵行動をなすに至る

捕えられて獄舎にあり死刑を宣告せらる

時に当研究班編成せられ内蒙古の地に皇軍幾百万の否全世界人類のため医学術研究を担当す

御身等は選ばれて既定の死を尊き研究実験に捧げ本日終焉す

其の世界人類に貢献せる所大なり
 以て瞑すべし

茲（ここ）に祭壇を設け霊を慰む

在天の霊来り饗（う）けよ

二月八日 研究班長 谷村少佐

(冬季衛生研究班 1941：付録其ノ三ノ4、付表第十一 [復刻版：368]。ただし原文のカタカナはひらがなに、旧字体は新字体に直した)

25

毒物の人体実験のために南京に出張

陸軍第九技術研究所（登戸研究所）の伴繁雄技術少佐は、2001年に出版された手記の中で、昭和16年5月上旬、参謀本部の命により、登戸研究所の7名が、毒物の人体実験を行うために、南京の支那防疫給水部へ出張したについて書いている。

伴繁雄『陸軍登戸研究所の内幕』実業書院出版、2001年、pp.41-42。

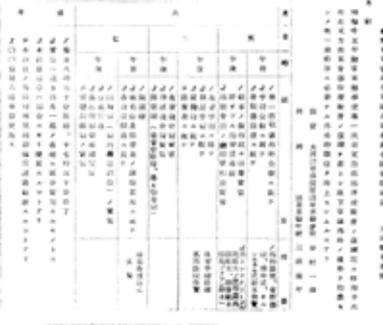


26

軍医の訓練「手術演習」

中国各地の陸軍病院では「手術演習」と称し、捕らえた中国人に麻酔をかけて生体解剖し殺害することが数多く行われた。こうした手術演習は、新任の軍医が前線で負傷した兵士をどうやって治療するかを教える訓練とされていた。

大同陸軍病院の谷村一治軍医大佐は、1941年と思われる6月5日から7日にかけて「駐蒙軍軍医将校陣科科学集教育」と称する3日間の短期教育プログラムを実施した。カリキュラム表の備考には、これらの実習のために「〇〇資材六体準備使用」と書かれているが、手術演習に関する多くの証言や谷村らが行った「冬季衛生研究」の内容から、この「〇〇資材」とは生きた人間を指すと考えられ、実習中か実習後に殺害されたと推測される。



27

生物兵器の実験

米軍調査官N・H・フェルはさまざまな生物兵器実験について詳細に報告している。炭疽菌を詰めた爆弾の実験に関しては、1947年6月の報告書で「主要な細菌戦専門家19人が、約1か月かけて、細菌兵器の人への使用についてまとめた60ページの英文レポート」から、下記のように概要を記している。

「大部分の場合、人間は杭に縛りつけられ、ヘルメットとよろいをつけていた。地上で爆発するものあるいは飛行機から投下され一定時間後に爆発するよう時限信管のついたものなど、各種の爆弾が実験された」

「10人のうち6人の血液中に菌の存在が確認され、このうちの4人は呼吸器からの感染と考えられた。この4人は全員死亡した。しかしこれら4人は、いっせいに爆発した9個の爆弾のどれかとわずか25メートルしか離れていなかった。」

フェルは同じ報告書に、ペストの生物兵器開発について、次のようにまとめている。

「(e) 噴霧実験

結果としてこの方法は非常に効果的だった。すなわち部屋の中に人間を閉じこめて行っても、また低い高度で飛行機から菌を噴霧して浴びせてもともに有効だった。各種試験に使われた人間の30ないし100パーセントが感染し、死亡率は少なくとも60パーセントに達した。」

28

ペストノミ

しかしながら、フェルは次のようにも書いている。

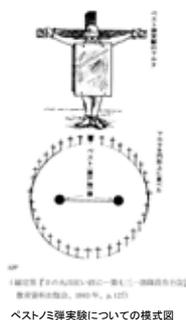
「(f) 安定性

ペスト菌を液状で、あるいは乾燥することで安定化することはできなかった。」

そこで731部隊で開発されたのが、生菌をそのまま撒くのではなく、媒介動物であるノミをペストを菌で汚染し、緩衝物にまぶしたり陶器製の爆弾に入れて撒く方法だった。

「(g) ペストノミ

ノミの繁殖とそれをネズミによってペストに感染させる方法について多くの研究が行われた。何キログラムものふつうのノミ（1グラムで約3000匹）の生産方法と、それに見合った感染方法の開発が行われた。このノミの研究は詳細な記録が残っており、すばらしいものである。ペストノミは最上の条件下では30日間生存し、その間感染力を保持することがわかった。また1人につきノミ1匹が刺せば感染するのがふつうであることも判明した。1平方m当たりノミが20匹いる部屋で人間を自由に動かし、10人中6人が感染し、うち4人が死亡した」



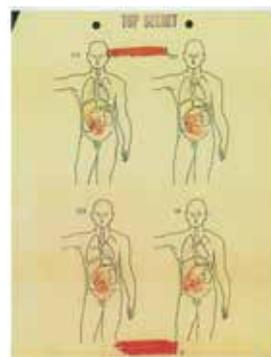
ペストノミ弾実験についての模式図

米軍報告書に描かれた細菌感染実験

731部隊のデータを手に入れた米軍の報告書には、日本の研究者が確かめた、炭疽、ペスト、チフス、パラチフスAおよびB、赤痢、コレラ、鼻疽に関する「MID50」（被験者の50%に感染を引き起こす病原体の最小量）が記載されている。これらのデータは、人間に実際に投与してみなければ得られない。例えば炭疽菌の噴霧実験に関して次のように記している。

「実験の代表的なものは、10立方メートルのガラスの部屋に人間を4人入れ、1mgm/cc溶液300ccをふつうの消毒用の噴霧器で噴霧するものであった。粒子の大きさの決定はしなかったが、4人のうち2人が皮膚に病巣ができ、そのため炭疽病になった」

(米軍調査官N・H・フェルの報告)



フェルの報告とは別の炭疽感染実験報告書の一部

ペストワクチン実験と生体解剖

731部隊の少年隊員だった篠塚良雄(旧姓・田村)は、2004年に出版した著書に次のように記している。



篠塚良雄氏 (2004年8月撮影)

篠塚良雄・高橋英知子『日本戦にも戦争がなかった——七三部隊少年隊員の手記』集英社出版部、2004年、pp.79-81。

「(f) 安定性
ペスト菌を液状で、あるいは乾燥することで安定化することはできなかった。」
そこで731部隊で開発されたのが、生菌をそのまま撒くのではなく、媒介動物であるノミをペストを菌で汚染し、緩衝物にまぶしたり陶器製の爆弾に入れて撒く方法だった。
「(g) ペストノミ
ノミの繁殖とそれをネズミによってペストに感染させる方法について多くの研究が行われた。何キログラムものふつうのノミ（1グラムで約3000匹）の生産方法と、それに見合った感染方法の開発が行われた。このノミの研究は詳細な記録が残っており、すばらしいものである。ペストノミは最上の条件下では30日間生存し、その間感染力を保持することがわかった。また1人につきノミ1匹が刺せば感染するのがふつうであることも判明した。1平方m当たりノミが20匹いる部屋で人間を自由に動かし、10人中6人が感染し、うち4人が死亡した」

「実験の代表的なものは、10立方メートルのガラスの部屋に人間を4人入れ、1mgm/cc溶液300ccをふつうの消毒用の噴霧器で噴霧するものであった。粒子の大きさの決定はしなかったが、4人のうち2人が皮膚に病巣ができ、そのため炭疽病になった」
(米軍調査官N・H・フェルの報告)

生物兵器の使用

日本軍が生物兵器を実際に使用したことについては数多くの史料と証言がある。なかでも、加害者である日本軍の幹部みずから当時の公文書に記しているものは、動かぬ証拠である。

1940年、当時は支那派遣軍参謀であった井本熊男中佐は、731部隊の軍医将校と数回協議したことを業務日誌に記している。1940年10月7日には731部隊の幹部より、寧波への細菌攻撃について「今迄の攻撃回数6回」と報告を受けている。

また井本は1941年11月常德でのペスト蚤散布や、1942年の日本陸軍の「浙贛作戦」の一環となされた細菌戦についても書いている。



浙贛作戦における日本軍兵士の様子(細菌戦とは無関係)

731部隊細菌戦国家賠償訴訟

石井機関による生物兵器攻撃の被害者やその家族は日本国を相手取って謝罪と賠償を求める裁判を起こした。東京地方裁判所は2002年8月、731部隊等の旧帝国陸軍防疫給水部が生物兵器開発のための研究及び同兵器の製造を行い、中国各地で生物兵器を実際に用いた事実を認定した。しかし原告の請求に関しては、当時は国が戦争被害について賠償する法律がまだ制定されていなかったことを理由に、全面的に棄却した。2005年7月、東京高等裁判所も同じ理由で控訴を棄却。最高裁判所も2007年5月、上告を棄却した。



判決に抗議する原告とその支援者たち

流行性出血熱感染実験

北里研究所から731部隊へ赴いた笠原四郎は、731部隊長を務めた北野政次らと共著で、流行性出血熱の病原体を確定したとの論文を1944年に発表した。

『日本獣医学会誌』第 34 巻第 2 号 (1944) pp. 7-9.
笠原 四郎、北野 政次、佐藤 俊、河田 英造、金澤 謙一、
横山 俊三、吉村 美栄、王福 正雄 (1944年 10月 25日発行)
Einführung des Erregers des epidemischen hämorrhagischen Fiebers,
Shiga Kanemon, Masuo Kazuo, Hatachi Kichiro, Wakabayashi
Shigetomo, Kazuo Kanazawa, Naohito Niino,
Masaru Yamamoto und Tadao Kudo,
Anatomisches Institut Kaiserl. Med. Akad.

しかし、文中の「猿」とは、実は人間のことである。サルは平熱は人間よりも高く、39.4°Cは猿にとっては平熱である。しかも笠原らは別の論文で、猿の場合は著明な流行性出血熱腎と発熱の両方を示すことはない」と書いている。そこで、笠原らが人間を実験材料とし、しかも生体解剖したことがわかる。笠原自身、戦後にこのことを認めている。

100部隊における毒物実験

関東軍軍馬防疫廠（100部隊）の軍曹だった三友一男は、1949年にソ連のハバロフスクで行われた軍事裁判の被告となり、毒物実験を補佐したことについて陳述した。

「二週間に亘って各被実験者に毒剤を盛ったこのような食事が5-6回支給されました。汁には主として朝鮮朝顔を混入し、粥にはヘロイン、煙草にはヘロインとバクタルを混入したと思います。朝鮮朝顔を混入した汁を与えられた被実験者は30分乃至1時間後には眠に落ち5時間眠り続けました」(p. 408-409)
「松井は私に、青酸加里の注射によって此のロシア人を殺害する様命じました。注射後此のロシア人は即死しました。
私は又、私が実験に使用した囚人3名を憲兵が銃殺した時に臨場しました」(p. 109)

三友一男ハバロフスク裁判陳述、p. 109
『細菌戦用兵器ノ準備及ビ使用ノ歴ヲ追新サテク日本軍軍人ノ事件ニ関スル公判書類』モスクワ・外国語訳出版所、1950年より

731部隊以外にも医学犯罪

731部隊における人体実験による虐殺は、この時期に日本が行った医学犯罪の一部でしかない。致死的な人体実験は南京の1644部隊や北京の1855部隊でも行われていたという多くの証言がある。また、米軍とオーストラリア軍の調査資料は、現パプア・ニューギニアのラバウルで、第24野戦防疫給水部の平野英之助軍医大尉が、米国・オーストラリア・ニュージーランドの捕虜を実験材料にしたことを明らかにしている。



米軍の調査報告書(サンダース・レポート補遺)に描かれた石井機関の地理的広がり

37

九州帝国大学医学部事件

1945年の5月から6月にかけて、九州帝国大学医学部第一外科の石山福二郎教授やその弟子たちは、撃墜されたアメリカ軍B29の搭乗員捕虜8名を手術実験で殺害した。

- 5月17日、2人の捕虜の片肺を全摘出。
- 5月22日、捕虜2名のうち1名に、胃全摘手術、大動脈を圧迫して止血し心停止させた後に開胸心マッサージ、心臓手術。残る1名は上腹部を切開し、胆嚢を摘出、肝臓の片葉を切除。
- 5月25日、1名の捕虜に脳手術(三叉神経遮断)。
- 6月2日、捕虜3名のうち、1名に右股動脈から約500ccを採血したのち代用血液約300ccを注射。1名に肺縦隔手術。残る1名に胆嚢摘出、代用血液200cc注射、肝臓切除、開胸心臓マッサージ、心筋切開および縫合、大動脈圧迫止血。

戦後、占領軍はこれを捕虜虐待として、横浜で行われた戦犯裁判で裁いた。石山教授は取り調べ中の1946年7月に拘留所で自殺。1948年8月28日に下された判決は、2人の西部軍幹部と3人の医学部教官を絞首刑、1人の軍幹部と2人の医師を終身刑、5人の軍幹部と8人の医師と看護婦長1人を重労働刑とする。しかし、朝鮮戦争が勃発したことにより減刑が行われ、結局死刑に処せられた被告はなかった。



犠牲になったアメリカ軍兵士たち



38

●特集● 戦争と医学界

15年戦争期における日本の医学犯罪



土屋貴志

15年戦争期に、日本の医学者が、医学の名の下に行った非人道的残虐行為(医学犯罪)のうち、文書で時期を特定できる事例を年表にまとめ、その一端を紹介する。関係者の発言には「医学の進歩」や「人類への貢献」を理由にこれらの残虐行為を正当化する論理が見出される。しかし、人類に貢献しさえすれば、いかに残虐な実験であっても正当化しうるのか。だとしたら医学とは、科学とは、いったい何か。

はじめに

1932年(実質的には1933年)から1945年8月の敗戦に至るまでの間、日本の医学者たちは主に海外の地で、総計何千あるいは何万ともいわれる人々を、実験の材料や手術の練習台にして殺害した。その主たる舞台となったのは、石井四郎が組織した「石井機関」(731部隊をはじめとする軍事医学研究ネットワーク)や、占領地域の陸軍病院であるが、満洲医科大学や九州帝国大学などの名門大学で行われたものもある。

しかし、医師の手で、医学の名のもとに行われた「医学犯罪」の実行者たちのほとんどは、戦後、それらの実験で得た生物兵器に関する科学的データを米国に引き渡すことにより、戦犯に問われることなく社会に復帰した。実行に協力していた日本の医学界は、これらの実行者たちをまったく断罪することなく受け入れ、医学犯罪について語ることをタブーとした。また、石井機関を全面的にバックアップし、医学犯罪をいわば「後援」し

ていた大日本帝国を引き継ぐ日本国政府は、戦後60年以上経過した現在でも、被害者遺族の訴えを黙殺し続け、謝罪も補償もいっさい行っていない。

本稿では、これらの医学犯罪の一端を紹介する。だが、ここに紹介できるのは、15年戦争期に日本が行った医学犯罪のほんの一部にすぎない。その大半は未だに闇に埋もれたままになっている。

1 医学犯罪の実例

文書で確認でき信憑性の高い医学犯罪のうち、時期を特定できる事例と、その時代背景となる出来事を、表1にまとめた。時代背景の出来事はゴシック体で示す。医学犯罪については、その典拠を引用文献に示した。紙幅の都合上、ここでは医学犯罪のごく一部(表中で★をつけたもの)しか具体的内容を紹介できないが、紹介できなかった事例の、概要は別稿¹⁾を、詳細は注に示した各典拠文献を、それぞれ参照されたい。

★1 背陰河の東郷部隊(731部隊の前身)における、水だけを飲ませる耐久実験

1935年から1936年にかけて背陰河の東郷部隊に傭人として勤めた栗原義雄は、自ら関わった水だけを飲ませる耐久実験について、1980年代頃に以下のように述べている⁶⁾。

● 土屋貴志 (つちや・たかし) ●

1961年生まれ。慶應義塾大学大学院博士課程単位取得退学後、横浜国立大学・千葉大学等の非常勤講師を経て、1994年大阪市立大学文学部助手。講師・助教授を経て、現在大学院文学研究科准教授。専門は倫理学および医療倫理学。

キーワード：医学犯罪 (medical atrocities), 731部隊 (Unit 731), 人体実験 (human experimentation), 研究倫理 (research ethics), 医療倫理 (medical ethics)

表1 15年戦争期における日本の医学犯罪・関連年表

年月日	医学犯罪・関連事項
1925	ジュネーヴ議定書締結（生物・化学兵器の使用を禁止）。
1925	石井四郎，生物兵器開発を軍上層部に働きかけ始める ²⁾ 。
1930	石井，陸軍軍医学校防疫部・防疫学教室教官となる。
1931.9	満洲事変，関東軍が満洲を支配下に収める。
1932	「満洲国」建国。
1932	陸軍軍医学校が防疫研究室（石井機関の中核）を新設。石井，部員となる。 背陰河に「東郷部隊」発足。
1933 秋	東郷部隊で致死的人体実験が開始される ³⁾ 。
1934.9	東郷部隊で捕虜16人が脱走 ⁴⁾ 。
1935	ハルビン郊外の平房で基地建設が始まる ⁵⁾ 。
1935 頃	東郷部隊の菅原敏，中国人捕虜に，水だけ飲ませる実験を実施 ⁶⁾ 。〔1-1,B,I,(2)〕★1 東郷部隊，陸軍の正式部隊となる（通称・満洲第731部隊）。
1936	満洲医科大学の田崎亀夫，死刑前の「匪賊」に行った鼠蹊淋巴肉芽種痘の接種実験を論文で発表 ⁷⁾ 。 〔1-1,C,III,(1)〕
1937	日中戦争始まる。日本，中国全土への侵攻開始。
1938 頃	731部隊，平房への移転を開始 ⁸⁾ 。
1938	陸軍，石井式澗水機を正式に採用。北京に1855部隊，南京に1644部隊，広東に8604部隊が新設される。
1939.9	ナチス・ドイツがポーランドに侵攻，第2次世界大戦始まる。
1939	731部隊，陸軍科学研究所・関東軍技術部化学兵器班と合同で化学兵器の人体実験 ⁹⁾ 。〔1-3,A,I,(3)〕
1939.8	ノモンハン事件。731部隊，生物兵器を使用 ¹⁰⁾ 。〔3,A,I,(2)&(6)〕
1940.5	山内豊紀ら，731部隊にて20人の中国人捕虜にコレラワクチン投与実験を実施 ¹¹⁾ 。〔1-2,B,I,(6)〕★2
1940.9	731部隊，大規模なイペリット（マスタード）ガス人体実験を実施 ¹²⁾ 。〔1-3,A,I,(1)〕
1941.10-11	日本軍，寧波を生物兵器で攻撃 ¹³⁾ 。〔3,A,I,(3)〕
1941	吉村寿人，ハルビンで「凍傷二就テ」講演 ¹⁴⁾ 。〔1-1,B,I,(1)〕
1941.1-2	谷村一治軍医少佐ら「駐蒙軍冬季衛生研究」実施。8人の中国人捕虜を虐殺 ¹⁵⁾ 。〔1-1&1-2,A,II,(1)〕★3
1941.5	登戸研究所の伴繁雄技術少佐ら，1644部隊で約15人の捕虜を毒物実験で殺害 ¹⁶⁾ 。〔1-3,D&A,I,(2)〕
1941(?)、6	谷村一治軍医少佐・三浦理平軍医中尉，大同陸軍病院で6人の捕虜を用い「軍陣外科学集合教育」を実施 ¹⁷⁾ 。 〔2,A,II,(1)〕
1941.6	731部隊の安達実験場でベストノミ爆弾の人体実験が行われる ¹⁸⁾ 。〔1-3,A,I,(5)〕
1941.11	日本軍，常德を生物兵器で攻撃 ¹⁹⁾ 。〔3,A,I,(3)〕
1941.12	日本軍，真珠湾・コタバル・香港を攻撃。太平洋戦争始まる。
1942.4.18	米空母より発進の爆撃機が東京を空襲，中国浙江省に着陸。
1942.5-8	日本軍，浙カン作戦で生物兵器を使用 ²⁰⁾ 。〔3,A,I,(3)〕
1942.8	731部隊長が石井から北野政次に交代。 シンガポールに9420部隊が設置される。
1942	池田苗夫軍医少佐，黒河陸軍病院で流行性出血熱の接種実験 ²¹⁾ 。〔1-1,A,I,(1)〕 青酸ガスの人体実験で捕虜を虐殺 ²²⁾ 。〔1-3,D&A,II&I,(3)〕
1942-43	満洲医科大学解剖学教室で「最も新鮮にして健康なる北支那人成人男性脳」を用いた人類学的研究を実施 ²³⁾ 。 〔1-1,C,III,(1)〕
1943 末	731部隊で50人の中国人捕虜にチフスワクチン実験 ²⁴⁾ 。〔1-2,B,I,(5)〕 731部隊安達実験場で炭疽爆弾人体実験 ²⁵⁾ 。〔1-3,A,I,(5)〕
1944	笠原四郎，北野政次ら，「猿」を用いた流行性出血熱の病原体確定を論文として発表 ²⁶⁾ 。〔1-1,B,I,(1)〕
1944.8-9	100部隊の松井経孝，毒物実験により捕虜を殺害 ²⁷⁾ 。〔1-3,B,II,(5)〕
1944-45	第24野戦防疫給水部の平野英之助軍医大尉，ラバウルで米国・オーストラリア・ニュージーランドの捕虜を用いて実験 ²⁸⁾ 。〔1-1&1-2,A,I,(7)〕
1945.1	731部隊の安達実験場でガス壊疽榴散爆弾の人体実験 ²⁹⁾ 。〔1-3,A,I,(5)〕 731部隊の武藤技師，食塩大量摂取の基礎代謝への影響について人体実験 ³⁰⁾ 。〔1-1,B,I,(6)〕
1945.3	米軍，東京・大阪・神戸・名古屋を大空襲。
1945.3	石井四郎，731部隊長に復帰。
1945.5-6	九州帝国大学医学部の石山福二郎教授ら，8人の米軍捕虜に実験手術を行い殺害 ³¹⁾ 。〔1-2,C,III,(4)〕★4
1945.8.6	米軍，広島に原爆投下。
1945.8.8	ソ連，日本に宣戦布告。日本軍，731部隊等で生き残っていた捕虜を全員殺害し施設を破壊，満洲から敗走することに。
1945.8.9	米軍，長崎に原爆投下。
1945.8.15	日本，連合国に無条件降伏，終戦。

年月日	医学犯罪・関連事項
1945.9-10	米陸軍化学戦部隊のマレー・サンダース軍医中佐, 来日し日本軍の生物兵器開発について調査 ³²⁾ . GHQ, 石井とその研究者たちに戦犯免責を保証 ³³⁾ .
1946.1-3	米陸軍化学戦部隊の A. T. トンプソン獣医中佐が石井とその研究者たちを調査 ³⁴⁾ . 致死的人体実験の証拠はつかめず.
1946.12	ニュルンベルク国際軍事法廷で「医師裁判」始まる.
1947.1	ソ連, 石井とその研究者たちの致死的人体実験に関する尋問を要求 ³⁵⁾ .
1947.4-6	米陸軍化学戦部隊の N. H. フェル主任, 致死的人体実験に関して石井とその研究者たちを調査 ³⁶⁾ .
1947.8	米三省調整委員会極東小委員会が石井とその研究者たちの戦犯免責を容認 ³⁷⁾ .
1947.8	ニュルンベルク「医師裁判」判決. 米国人判事団, 「ニュルンベルク・コード」を明文化.
1949.12	ソ連, 関東軍・731 部隊・100 部隊の将校と下士官をハバロフスクで軍事裁判にかける (「ハバロフスク裁判」) ³⁸⁾ . 米国, 共産主義者の宣伝にすぎないと非難.
1956	中華人民共和国, 日本人戦犯を軍事裁判にかける (731 部隊幹部の被告は 1 人のみ).
1959	石井四郎, 喉頭癌で死去 (享年 67 歳).

注) 医学犯罪の事項には, その目的, 実施責任者の属性, 実施機関, 出典資料の種類に関して分類し, [目的, 実施責任者, 実施機関, 史料] の順に略号で示した. 略号の意味は以下の通りである. ●目的: 1. 研究 (「人体実験」), 1-1. 病態の解明, 科学的知識の獲得, 1-2. 治療法開発, 1-3. 兵器開発, 2. 教育ないし訓練 (「手術演習」), 3. 生物兵器の使用. ●実施責任者: A. 軍医, B. 軍属の医学者 (医師資格保有者), C. 大学医学部・医科大学の医学者, D. 軍機関の研究者 (医師資格非保有者). ●実施機関: I. 石井機関, II. その他の軍の機関 (陸軍病院, 研究所など), III. 大学医学部・医科大学. ●史料: (1) 実施者本人による研究論文, 学術報告書, (2) 実施者本人による証言, (3) 日本文書 (軍資料含む), (4) 米国公文書 (軍資料含む), (5) ソ連公文書 (ハバロフスク裁判判書類), (6) 中国公文書 (軍事裁判資料), (7) その他の国 (オーストラリアなど) の公文書.

自分は, 軍属の菅原敏さんの下で水だけで何日生きられるかという実験をやらされた. その実験では, 普通の水だと 45 日, 蒸留水だと 33 日生きました. 蒸留水を飲まされ続けた人は死が近くなると「大人, 味のある水を飲ませてくれ」と訴えました. 45 日間生きた人は「左光亜 (サコウア)」という名前の医者でした. 彼は本当にインテリで, 匪賊ではなかったですね.

★2 731 部隊におけるコレラワクチン実験

神奈川県立衛生試験所の研究員だった山内豊紀は, 彼の上司と共に, 超音波でウイルスを弱毒化して作る「超音波ワクチン」の研究を行った. この研究は石井の目に止まり, 1938 年に山内らは石井に雇われる. 山内らは 1939 年 6 月に 731 部隊へ派遣され, 1940 年 5 月には特設監獄に収容されていた 20 人の中国人にコレラワクチンの実験を行ったと, 中国の戦犯取り調べに対する自筆供述調書 (1951 年 11 月 4 日付) で述べている. この中国人たちがどんな人たちなのか監督者の 1 人に尋ねたところ「匪賊だ. みんな死刑判決を受けた奴らで, 部隊が勝手に捕まえてきたんじゃない. 軍司令部の許可を得て外部から死刑犯を連れてきたんだ. そんなことに興味を持たないで, きちんと仕事をすればいいんだ」といわれたという. 実験内容は次のようなものであった¹¹⁾.

超音波ワクチンを予防接種したのは計 8 人, 陸軍軍医学校でつくったコレラ・ワクチンを注射したのは計 8 人, 未

処理者 (対照用) が 4 人で, いずれも二, 三十歳の中国人であった. この人たちはみな, 石井部隊が管理する第七, 八棟の監房に収容されていた. [中略] 人体実験における感染方法は, 前述したとおり, 接種した 16 人と予防接種をしていない 4 人に, 生菌を混ぜた牛乳を飲ませるというものだった. 感染用の細菌は石井部隊が保管していたいわゆる「細菌兵器」で, 1000 分の 1 グラムで致死量に達する毒力を有していた. このときの感染量は 500 分の 1 グラムで, 目的は猛毒のコレラ菌を予防しうる効果的なコレラ・ワクチンをつくること, 敵側に猛毒のコレラ菌を散布して細菌戦をおこなうことであった.

人体実験の結果は, 超音波ワクチンの効力がとくに優れていることを証明するものだった. 超音波ワクチンを接種した人は皆元気で, 1 人だけ軽い頭痛と腹痛を覚えたが, 三日めには回復した. しかし軍医学校製のワクチンを注射した人は, その多くが下痢をし, うち 3 名は重症, 1 名が死亡した. 対照用の 4 人はいずれも発病し, 三日めに全員死亡した. 石井四郎は超音波ワクチンに効果があると知って, われわれに大量に生産するよう命令した.

★3 谷村らの「冬季衛生研究」

大同陸軍病院の谷村一治軍医少佐は, 他の軍医将校 10 名とともに総勢 56 人の「冬季衛生研究班」を組織し, 1941 年 1 月 31 日から 2 月 11 日にかけて内蒙古で, 凍傷, 戦場での手術法開発, 止血法, 輸血法などについて研究する野外演習を行った. その携行品一覧表の中に「生體」として 8 人の中国人の氏名と年齢が記されている. 彼らは実験や手術の材料にされ, 最後には生体解剖で殺されるか銃殺された. この演習の極秘報告書は 1970 年

代後半に東京の古書店で発見され、1995年に復刻版が出版されたが¹⁵⁾、実験や手術についてスケッチや写真入りで詳細に記録している。

2月6日早朝、谷村らは6人の被験者に対し、濡れた靴下や手袋をはめさせる、泥酔させる、空腹にさせる、アトロピンを投与する、などの条件下で凍傷実験を行った。また、戦場での手術法を開発するための実験手術は「創ノ開放治療ノ能否及程度」に関する「野外ニ於ケル試験」と、「手術創ノ観察」「開腹術経過観察」等の「天幕内ニ於ケル生体試験」の2種類で、いずれも「生体ヲ以テスル試験」であった(11)。1941年2月4日「手術用天幕内部ノ応急装備ヲ施シ開腹術(腸切除側々吻合術)ヲ生体(第一号)ニ施行」した後、経過を観察した(22-23)。翌2月5日には「手術創ノ経過観察ノ為生体三号ヲ使用シ左大腿切断手術創、右大腿切断第一期縫合創、左下腹部皮膚切除開放創ヲ作ル」(24-25)。「生体七号」には「左上膊軟部貫通銃創」と「右大腿軟部貫通銃創」の、「生体六号」には「左腹腰部貫通銃創」と「左胸背部貫通銃創」の、それぞれ「第一線処置研究」を行っている(50)。2月6日には「生体ヲ用ヒテノ第一線外科的処置」として「生体五号」に「左膝臑動脈」や「右下腿筋切断」の鉗子止血を行った後「右臀部軟部貫通銃創」の切除を行った(51-52)。2月7日には「生体八号」を用いて「右胸部穿透性貫通銃創」の処置法を研究した(52)。

さらに、止血法の研究としては、2月5日、銃創治療実験を受けたばかりの「生体六号」と「生体七号」に対し、前者に「上膊介達止血」、後者に「大腿介達止血」を行う(51)。翌6日には「生体五号」を「手術用天幕内ニテ左膝臑部露出後野外ニ搬出し」「左膝臑動脈各種鉗子止血」「右下腿屈筋切断鉗子止血」を実施(51-52)。2月8日には同じ「生体五号」の上膊部を「螺旋止血帯」や「平紐」を用いて、防寒外套や軍衣など服装の条件をさまざまに変えて止血している(53-54)。

輸血実験としては、2月5日「生体一号三号」に「輸血並ニ常温リングル液静脈注射」を行う(25)。2月7日には、魔法瓶に保存しておいた「保存血」、

外気にさらして凍結させた「凍血」、および羊の血液の、3種類の輸血実験を実施(29)。翌8日には「屍体心臓血ノ輸血」(30)を行っているが、この「屍体心臓血」は、前日深夜24時に「生体八号」を銃殺することによって得たものであった(「生体処置 明日第二部ニ於テ屍血必要ナル為二十四時第一部ニヨリ生体第八号ヲ銃殺ニ処ス」)(29)。

★4 九州帝国大学医学部「生体解剖」事件

1945年の5月から6月にかけて、九州帝国大学医学部第一外科の石山福二郎教授、西部軍司令部付偕行社病院詰見習医官小森拓見習軍医、それに石山教授の弟子である第一外科医局員らが、西部軍に撃墜された米軍B29の搭乗員捕虜に手術実験を行って殺害した。西部軍はこれらの捕虜を処刑することにしたが、実験材料として使ってもよいと、小森軍医と石山教授の手に委ねたのである。

1945年5月17日、石山教授らは2人の捕虜の片肺を全摘出する。2人の捕虜のうち1人は、搭乗機から脱出し地上に降りた際に住民に撃たれた散弾が肺の近くに残っていたが、もう1人はまったく無傷だった。手術の際には、当時代用血液として研究中だった、殺菌し希釈した海水を輸液する実験も行われ、散弾が肺の近くに残っていた捕虜の手術の際に約2000ccの代用血液を注射した。

5月22日には、捕虜2名のうち1名に、胃全摘手術と、大動脈を圧迫して止血し心停止させた後の開胸心マッサージと、心臓手術を行った。残る1名は上腹部を切開し、胆嚢を摘出、肝臓の片葉を切除している。

5月25日には1名の捕虜に脳手術(三叉神経遮断)を行った。6月2日には捕虜3名のうち、1名には右股動脈から約500ccを採血したのち代用血液約300ccを注射。1名には肺縦隔手術を実施。残る1名には胆嚢摘出、代用血液200cc注射、肝臓切除、開胸心臓マッサージ、心筋切開および縫合、大動脈圧迫止血を行う。こうして計8名の捕虜が実験材料にされ殺された。

この一連の実験手術による殺害を、戦後GHQは捕虜虐待として、横浜で行われた戦犯裁判で裁いた。すでに小森見習軍医は1945年6月の福岡

大空襲の際に焼夷弾の直撃を受けて重傷を負い、翌月に死亡していた。石山教授は拘留所に収監されたが、取り調べ中の1946年7月に獄中で自殺する。1948年8月28日に下された判決は、2人の西部軍幹部と3人の医学部教官を絞首刑、1人の軍幹部と2人の医師を終身刑、5人の軍幹部と8人の医師と看護婦長1人を重労働刑とした。しかし、朝鮮戦争が勃発したことにより減刑が行われ、結局死刑に処せられた被告はなかった。

2 医学犯罪を正当化する論理

これらの医学犯罪は、素人目には、正当化の余地のない、単なる残虐行為にしか見えない。しかし、実行者や関係者の発言には、これらの行為を正当化する論理が表れていることがある。

たとえば、上述の「冬季衛生研究」では、「生體」として実験材料にされ虐殺された8名の中国人の慰霊祭を最後に行っている。そこで班長の谷村一治は、次のような「弔辞」を読んだ³⁹⁾。

研究班生体ノ靈ニ告クノ御身等ハ生国生年月日ハ異ナレトモ東亜ノ一角中華民国ニ生ヲ受ケ不幸ニシテ誤レル思想行動ヲナシ蒋介石ノ走狗トナリ公明正大ノ正義ノ皇軍ニ不利ナル對敵行動ヲナスニ至ルノ捕エラレテ獄舎ニアリ死刑ヲ宣告セラルノ時ニ当研究班編成セラレ内蒙古ノ地ニ皇軍幾百万ノ否全世界人類ノタメ医学術研究ヲ担当スノ御身等ハ選ハレテ規定ノ死ヲ尊キ研究実験ニ捧ケ本日終焉スノ其ノ世界人類ニ貢献セル所大ナリノ以テ瞑スヘシノ茲ニ祭壇ヲ設ケ靈ヲ慰ムノ在天ノ靈来リ饗ケヨ

ここで谷村は、実験材料にされ虐殺されたことは「皇軍幾百万の、否、全世界人類のため」であり、彼らは「選ばれて」すでに定められていた自分の死を「尊き研究実験に捧げ」たのであって、「世界人類に貢献」したところが大きかった、と述べている。彼らの研究内容がそれほど人類に貢献するものであるとは判断しがたいが、もし仮にそうだったとしても、それが犠牲者の「霊」自身にとって是認しうる理由になるだろうか。

また、九州帝国大学医学部の「生体解剖」事件に際し、その舞台となった解剖実習室の管理責任者として罪に問われた平光吾一・解剖学第2講座教授は、服役終了後に次のように書いている⁴⁰⁾。

……私は石山教授の「手術」が恐らく二つの目的から行

われたのではなからうか、と考えた。一つは軍陣医学を進めるためのものであり、他の一つは在来の外科医学では研究未到達な面を解明することにおいたということである。

血漿の代りに塩水の注射が可能かどうかの実験を行ったということだが、これは戦争医学にどうしても欠くことの出来ない要請なのである。戦争医学の課題は輸血面の解決にあるといってもよいと思う。血漿の無い、または、不足がちの戦場で、輸血を必要とする患者にどの程度まで、代用血漿に当てられた塩水を注入することができるか、これは人体の場合、約二リットル位までは可能だろうという極めて曖昧な答えしか、当時は得られていなかった。

また、心臓、脳、全肺切除手術などは、今日でこそ各方面の外科医が行っているが、十数年前の当時では、検事の論告通り「世紀の大手術」であった。と同時に、この三点は外科医学の最大の研究課題でもあった。たとえば、肺手術だ。成形手術より更に望ましい肺の切除方法を、より効果的に進めるための人体手術は、外科医ならどうしてもやってみたい問題だったと思う。

検事は、法廷で「この事件は何も学問的に価値のあることは行っておらず、徒らに捕虜を虐殺した」と論じている。しかし事実は、肺臓全摘出とか、現在行われている方法の心臓手術の研究、さらに癲癇療法のための脳切開など、当時の外科医が願望した外科療法の課題に、石山教授は文字通り世紀のメスを振ったのである。彼のとった手段はやり過ぎだったとしても、決して捕虜を徒殺したわけではなかった。たゞ惜しむらくは、その手術に関する記録を全く残しておかなかったことである。〔中略〕

医学の進歩は、その歴史を省みる時、このような戦争中の機会を利用してなされていることが多いのだ。生体解剖それ自体の行為は勿論許されるべきものではない。しかし、その許されざる手術を敢えて犯した勇氣ある石山教授が、自殺前せめて一片の研究記録なりとも遺しておいてくれたら、医学の進歩にどれ程役立ったことだろうか。犠牲者の霊も幾分なりとも浮かばれたであろう。

ここには、たとえ「勿論許されるべきものではない」残虐な実験であっても、記録を残し「医学の進歩」に「役立った」ならば、「犠牲者の霊も幾分なりとも浮かばれ」る、という医学者の論理がある。これは「冬季衛生研究」の弔辞に見られる谷村の論理とまったく同じものだ。

おわりに

しかし、実験材料にされた当の犠牲者にとって、このような論理は容認できるものだろうか。捕らえられて処刑される者にとって、このような殺され方のほうが「浮かばれる」といえるだろうか。そう言わしめる医学者の論理とは、患者の病を癒し苦痛を和らげるという医学の根本目的と、いか

にして両立しうるのだろう。科学の進歩が必ず人類に貢献するといえるか。もし仮にいえるとしても、人類への貢献は虐殺を正当化する理由になるか。いったい科学とは何か、医学とは何か。

注および参考文献

- 1) 土屋貴志「15年戦争期の日本による医学犯罪」大阪市立大学人権問題研究センター編『人権問題研究』6, 41-65 (2006).
- 2) 常石敏一『医学者たちの組織犯罪』(朝日文庫, 1999) p. 130.
- 3) 前掲書2) p. 304ff.
- 4) 中央档案館ほか編『人体実験』(江田憲治ほか編訳, 同文館, 1991) 松村解説 pp. 283-285.
- 5) 関成和『七三一部隊がやってきた村』(松村高夫ほか編訳, こうち書房, 2000) p. 37.
- 6) 前掲書2) p. 167.
- 7) 田崎亀夫「鼠蹊淋巴肉芽種痘("N.F"病)ノ研究(第1報)」『満洲医学雑誌』24, 785-804, esp. p. 790 (1936).
- 8) 前掲書2) p. 178.
- 9) 金原節三「陸軍業務日誌摘録」前編, その1のイ. 所収: 吉見義明, 伊香俊哉「日本軍の細菌戦」『季刊・戦争責任研究』2, 8-29 (1993), esp. pp. 19-20.
- 10) 滝谷二郎「殺戮工廠・731部隊」(新森書房, 1989) pp. 187-188 および p. 208; 七三一研究会編『細菌戦部隊』(晩聲社, 1996) pp. 64-67.
- 11) 前掲書4) pp. 96-97.
- 12) 加茂部隊「きい弾射撃ニ因ル皮膚傷害竝一般臨床的症狀観察」『七三一部隊作成資料』(田中明, 松村高夫編, 不二出版, 1991) pp. 1-42.
- 13) 井本熊男「業務日誌」第9巻, 第10巻. 所収: 前掲9) 吉見, 伊香 pp. 11-12 (1993).
- 14) 吉村寿人「凍傷ニ就テ」(第15回満洲医学会哈爾濱支部特別講演, 1941. 10. 26), 所収: 前掲書12) 田中, 松村編 pp. 225-288.
- 15) 冬季衛生研究班『駐蒙軍冬季衛生研究成績』(1941.3. 復刻版・現代書館, 1995). 当報告書から本文中に引用した箇所のはきは()で示した.
- 16) 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』(芙蓉書房出版, 2001) pp. 81-82.
- 17) 大同陸軍病院「駐蒙軍軍医校軍陣外科集合教育課程表」(1941?. 6. 5-7. 冬季衛生研究班『駐蒙軍冬季衛生研究成績』付録).
- 18) 『細菌戦用兵器ノ準備及ビ使用ノ廉デ起訴サレタ元日本軍人ノ事件ニ関スル公判書類』(モスクワ・外国語図書出版所, 1950) p. 77.
- 19) 井本熊男「業務日誌」第13巻, 第14巻. 所収: 前掲9) 吉見, 伊香 pp. 14-15 (1993).
- 20) 井本熊男「業務日誌」第19巻. 所収: 前掲9) 吉見, 伊香 p. 19 (1993).
- 21) 池田苗夫「流行性出血熱の流行学的調査研究」『日本伝染病学会雑誌』41 (9), 337-347 (1967); 池田苗夫「流行性出血熱のシラミ, ノミによる感染実験」『日本伝染病学会雑誌』42(5), 125-130 (1968); 朝野富三., 常石敏一『奇病・流行性出血熱』(新潮社, 1985).
- 22) 井本熊男「業務日誌」第22巻. 所収: 前掲9) 吉見, 伊香 p. 20.
- 23) Suzuki, N. (鈴木直吉) et al. Histological study of the Chinese brain. Part I. On the cytoarchitectural structure of the regio frontalis. *Arbeiten aus dem Anatomischen Institut der Kaiserlich-Japanischen Universität zu Sendai* 25, 139-186 (1942); 大野憲司「支那人大脳皮質, 特ニ後頭部ニ於ケル細胞構成学的研究」『解剖学雑誌』19 (6), 1-58 (1942); 竹中義一「北支那人大脳皮質, 特ニ側頭葉の細胞構成学的研究」『解剖学雑誌』21 (1), 1-38 (1943); Terui, S. (照井精任) et al. Histological study of the Chinese brain. Part III. On the cytoarchitectural structure of the regio parietalis. *Japanese Journal of Medical Sciences Part I, Anatomy* 10 (2), 239-273 (1943); 竹中義一「北支那人大脳皮質, 特ニ旁嗅野, 胼胝體下廻轉, 外側嗅廻轉, 半月状廻轉, 嗅野, 島横廻轉および島圓に於ける細胞構成学的研究」『解剖学雑誌』22 (2), 81-103 (1944); 五十嵐稔「北支那人大脳皮質—特に帯回轉の皮質構成に就て」『解剖学雑誌』22 (5), 35[315]-49[329], (1944); Terui, S. (照井精任). Zur Kenntnis der Cytoarchitektonik des Insusium griseum beim Menschen. *Japanese Journal of Medical Sciences Part I, Anatomy* 11 (3), 203-216 (1944) など.
- 24) 前掲書18) pp. 462-463.
- 25) 前掲書18) p. 322.
- 26) 笠原四郎, 北野政次ほか「流行性出血熱の病原体の決定」『日本病理学会会誌』34 (1-2), 3-5 (1944).
- 27) 前掲書18) p. 109, pp. 408-411.
- 28) 田中利幸「人体実験に使用された連合軍捕虜」『戦争責任研究』3, 26-35, (1994); Tanaka, Y. Japanese biological warfare plans and experiments on POWs. in *Hidden Horrors: Japanese War Crimes in World War II* (Tanaka, Y., Westview Press, 1996) pp. 135-165.
- 29) 前掲書18) p. 355.
- 30) 前掲書4) p. 92.
- 31) SCAP: Legal Section: ADM. DIV. MISC. File. Trial Case #394: Record of trial in the case of United States vs. Kajuro Aihara. NARA, Record Group 331, Stack Area 290, Row 11, Compartment 34, Shelf 4, Boxes 1331-1332; 東野利夫「汚名」(文春文庫, 1985); 仙波嘉清「生体解剖事件」(金剛出版, 1963); 上坂冬子『生体解剖』(中公文庫, 1982).
- 32) Sanders, M. Report on scientific intelligence survey in Japan, September and October 1945, Volume V: Biological warfare, 1 November 1945. 近藤昭二編『731部隊・細菌戦資料集成』(CD-ROM, 柏書房, 2003) Disc 2. 常石敏一編訳『標的・イシイ』(大月書店, 1984) pp. 219-311.
- 33) 太田昌克『731 免責の系譜』(日本評論社, 1999) p. 68ff.
- 34) Thompson, A. T. Report on Japanese biological warfare (BW) activities, 31 May 1946. 前掲32) 近藤 Disc 2. 前掲書32) 常石 pp. 312-376.
- 35) McQuail, R. P. Request for Interrogations. U. S. National Archives and Records Administration [NARA], Record Groups 331. 前掲32) 近藤 Disc 2. 前掲書32) 常石 pp. 392-396.
- 36) Fell, Norbert H. APO# 00. 24 June 1947. Utah: Dugway Proving Ground, File No.006. 前掲32) 近藤 Disc 3. 前掲32) 常石 pp. 273-277.
- 37) State-War-Navy Coordinating Subcommittee for the Far East. Interrogation of Certain Japanese by Russian Prosecutor. Enclosure. SFE 188/2, 1 August 1947. Reference: SWNCC 351/2/D. NARA, Record Group 165, Entry 468, Box 428. 前掲32) 近藤 Disc 3. 前掲書32) 常石 pp. 415-419.
- 38) 前掲書18).
- 39) 前掲書15) p. 368, 付録其ノ三ノ4. ただし旧字体は新字体に直した.
- 40) 平光吾一「戦争医学の汚辱にふれて」『文藝春秋』1957年12月号, 204-214, esp. pp. 207-208.